

「第14回恵比寿映像祭」 出品作家・上映プログラム追加発表！



Yebiso International Festival
Art & Alternative Visions

AFTER THE SPECTACLE

www.yebizo.com

第14回恵比寿映像祭「スペクタクル後」

令和4（2022）年2月4日（金）～2月20日（日）《15日間》

月曜休館／10:00～20:00（最終日は18:00）※入館は閉館の30分前まで

入場無料 ※3階展示室、定員制のプログラム（上映、イベントなど）、一部のオンラインプログラムは有料

会場 | 東京都写真美術館／恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所ほか

TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

映像文化の創造と紹介・体感の場としてのフェスティバル

恵比寿映像祭は、映像領域と芸術領域を横断する国際フェスティバルとして、平成21年（2009年2月）より開催し、今回で14回目を迎えます。文化都市東京・恵比寿から発信するフェスティバルとして、国内外の新進作家の発掘・支援を行い、国際交流と地域交流の双方を活性化させ、そして多様な表現に触れることで培われる豊かな感性を育む場として「開かれた」機会づくりを行っています。

映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展を育み、継承していくことなどを広く共有する場となることを目指しています。

第14回となる今回は、「スペクタクル後」をテーマに、19世紀後半の博覧会の歴史から現代にいたるイメージの変容まで幅広く考察していきます。

開催目的

1. 映像文化を紹介・体感する

多くの人々が多様な映像芸術表現に触れる「開かれた」機会（豊かな感性を育む機能）

2. 映像文化を創造する

新進作家の発掘・支援（作家の跳躍台としての機能）

3. 映像文化の楽しさと出会う

フェスティバルを通じて映像文化の楽しさと出会い、ジャンルや地域の垣根を越え交流

ロゴについて

映像をめぐる、ひとつではない答えをみんなで探していこう！という「恵比寿映像祭」の基本姿勢を、オープンなフレームとしてのカッコに託しました。

映像というカッコにあえて入れてみることで、はじめて見えてくるものがあるはず——

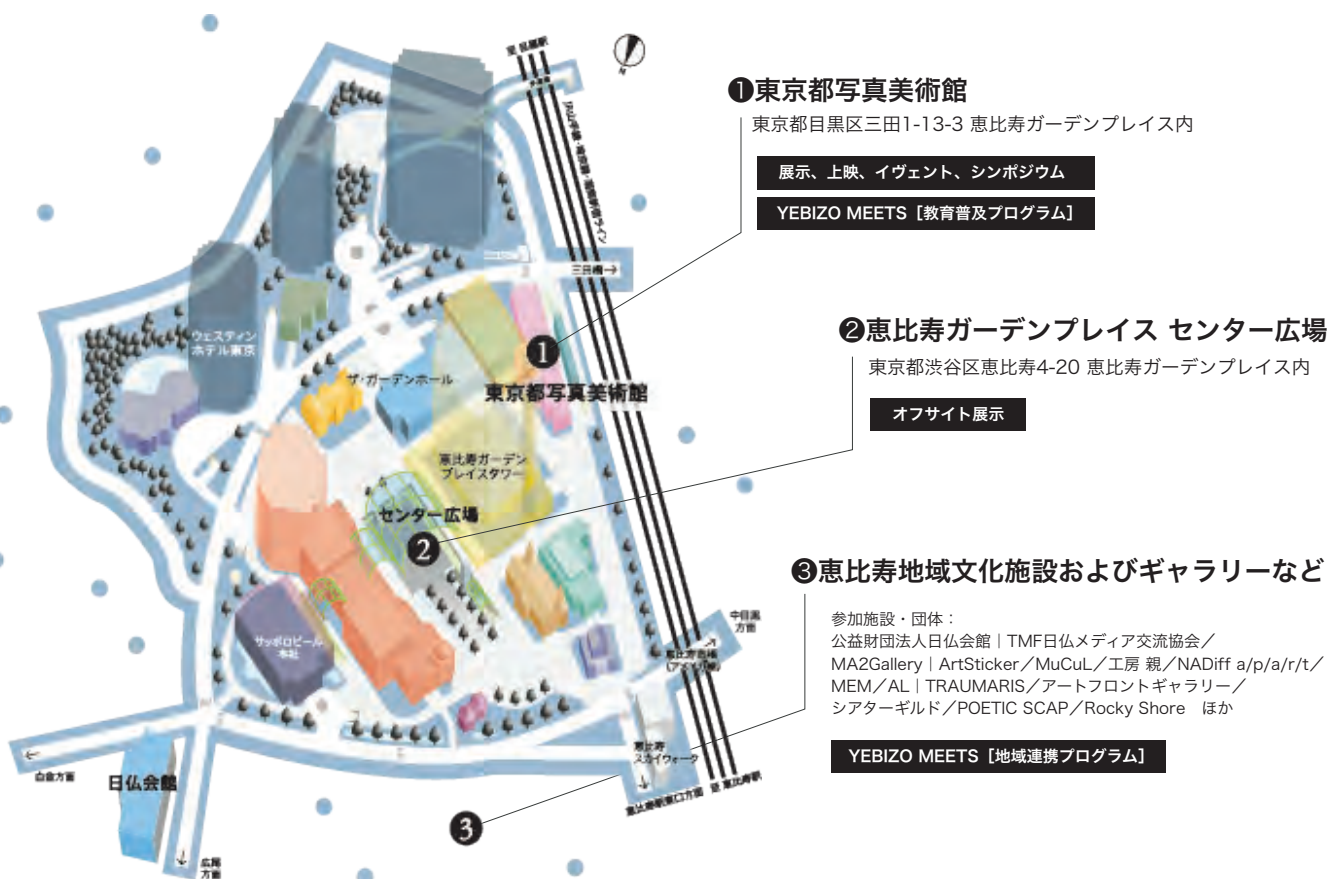
何かを限定するためではなく、いろんなものを出し入れして、よく見てみるためのカッコです。



開催概要

名称	第14回恵比寿映像祭「スペクタクル後」 Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2022 AFTER THE SPECTACLE
会期	令和4（2022）年2月4日（金）～2月20日（日）《15日間》月曜休館
時間	10:00～20:00（最終日は18:00）※入館は閉館の30分前まで
会場	東京都写真美術館／恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所ほか
料金	入場無料 ※3階展示室、定員制のプログラム（上映、イベントなど）、一部のオンラインプログラムは有料 ※オンラインによる日時指定予約を推奨します。
主催	東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館・ アーツカウンシル東京／日本経済新聞社
共催	サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館
後援	TBS ／J-WAVE 81.3FM
協賛	サッポロビール株式会社／東京都写真美術館支援会員
公式HP	www.yebizo.com
公式SNS	Twitter: @topmuseum twitter.com/topmuseum/ Instagram: @yebizo instagram.com/yebizo/

会場構成（予定）



第14回恵比寿映像祭 スペクタクル後

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2022 AFTER THE SPECTACLE

誰もが経験したことのないパンデミックによって、私たちの日常は大きく変化しました。その中においても、映像はより身近なメディアとして浸透し、社会、政治、経済、文化の変化を映し出すツールのひとつになっています。とりわけ、ソーシャルメディア上のコミュニケーションによって、誰もが複層的な次元で映像体験が可能となった現代は、祝祭的イベントから、災害や戦争などの出来事まで、いかなる情報も、一大スペクタクルに見える時代です。*

スペクタクルという言葉は、風景や光景という意味のほかに、しばしば壮大な見世物という意味で使われています。その語源、ラテン語のspectaculum（スペクタラム）には、光学的な意味と同時に、地震や火山噴火などの天変地異などが含まれていました。19世紀になると、近代国家の誕生とともに、博覧会、写真、映画のなかで、それまでの天変地異は、壮大な風景や見世物として視覚的に再現され、人々に受容されていきます。

第14回恵比寿映像祭では、「スペクタクル後」をテーマに19～20世紀にかけての博覧会や映画の歴史から現代にいたるイメージおよび映像表現について考察します。現代作家による展示や上映、イベントに加え、小原真史をゲスト・キュレーターに迎えた博覧会関連資料と当館コレクションによる企画や、映像作家の遠藤麻衣子によるオンライン映画プロジェクト、さまざまな作品との出会いを拡げる教育普及プログラムなどの新たな構成によって、映像体験の可能性を探っていきます。

*フランスの思想家のギー・ドゥボールは1967年に発表した『スペクタクルの社会』で、見世物という限られた意味ではなく、「イメージ」で構成された現代社会を把握する概念として「スペクタクル」を考察し、メディアによってイメージだけを植え付けられ、ただ受け身でいる状態をスペクタクル社会として批判しています。

第14回恵比寿映像祭ディレクター 田坂博子

「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」のコンセプト

いかなる情報も一大スペクタクルに見える時代のなかで、イメージや視覚表現を「みる／みられる」「とる／とられる」という視点から考えていきます。

「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」をテーマに、歴史／現代性／体験という構成で、複数の展示や上映、イベント、さらに未知の作品との出会いを拡げる教育普及プログラムが加わり、恵比寿映像祭ならではの映像体験の可能性を探っていきます。

ゲスト・キュレーターの小原真史による博覧会関連資料と東京都写真美術館に収蔵されている貴重なコレクションを組み合わせた展示から、映像作家・遠藤麻衣子によるオンライン映画プロジェクトまで、映像史・視覚史・技術史の原初を詳らかにすることを出発点に、現代の映像表現を多様な作品によって提示していきます。

歴史—博覧会・映画の登場とスペクタクル

インディペンデント・キュレーターの小原真史をゲスト・キュレーターに迎え、小原が所蔵する約2,000点の博覧会関連資料の一部と東京都写真美術館のコレクションを組み合わせて展示します。総合テーマである「スペクタクル後」を考える上で重要となる19世紀後半から20世紀を出発点に、歴史を深く掘り下げることで、あらためてイメージを取り巻く変容を考察し、現代の作家へとつなげていきます。



《ヴィサヤ族、フィリピン村（セントルイス万国博覧会）》
1904年、個人蔵

現代性—映像の「スペクタクル後」の可能性

国内・海外の現代作家による作品の展示、上映、イベントによって、最前線の映像表現の可能性を提示します。

新型コロナウイルス感染症の世界的なパンデミックを経て、映像の受容もオフラインからオンラインへと重心が大きく変化してきました。「スペクタクル後」といえる今日の状況をふまえ、気鋭の映像作家の遠藤麻衣子は新作オンライン映画を発表します。

※本プロジェクトは恵比寿映像祭では初となるオンラインでの新作委嘱となります。

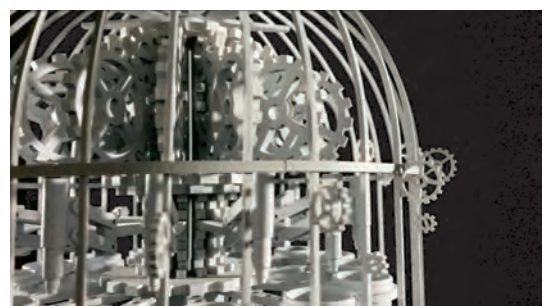


遠藤麻衣子《オンライン映画（仮題）》より ©Maiko Endo 2021

映像の「スペクタクル後」を体験する

—ライブパフォーマンスやYEBIZO MEETS：教育普及プログラム

スペクタクルという言葉は、「風景」や「光景」という意味のほかに、「見世物」や「ショー」という意味でも使われます。会期中、さまざまなアーティストによるトークライブやパフォーマンスを通して「スペクタクル後」を紐解いていきます。また、多様な人々が楽しめるワークショップをはじめとする教育普及プログラムの充実をはかり、未知の作品との出会い、鑑賞者の発見を促す機会を提供します。フィジカル／オンラインを組み合わせたハイブリッドな形態での開催を予定しています。

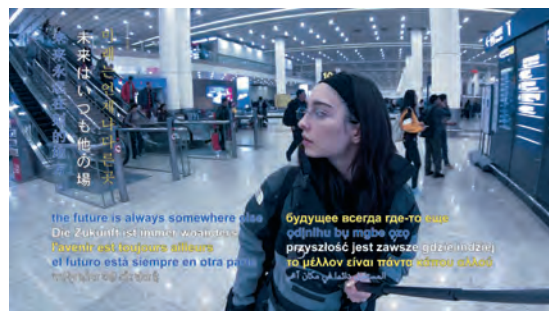


パンタグラフ《Clockwork Birdcage》2020年

「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」の見どころ

歴史的考察から国内・海外の現代作家による最前線の表現までを提示する—展示プログラム

世界中で大小様々な博覧会が開催され、多くの来場者が「スペクタクル」な祝祭空間に酔いしれた19世紀半ばから20世紀前半。グローバリズムや消費資本主義、コロニアリズムやレイシズムなど現代社会の特徴的な事象もこの時代に強化されたと語る、ゲスト・キュレーターの小原真史による企画展示「スペクタクルの博覧会」は、博覧会の時代を省みること、現代の我々がもつ欲望の根源を捉え直します。また、初監督長編映画《エル プラネタ》が日本での公開を控え、注目されるアーティスト、アマリア・ウルマンは、SNSをはじめ様々なメディアを駆使し、ジェンダーや格差などの社会問題に鋭く切り込む作品により、「スペクタクル後」の社会を強く意識させます。過去と現在をつなぐ作品群をどうぞお楽しみください。



アマリア・ウルマン《Buyer Walker Rover (Yiwu) Aka. There then》2019年
©2019 Amalia Ulman
Courtesy Amalia Ulman and Wuzhen International Contemporary Art Exhibition.



《映画愛の現在 第1部/壁の向こうで》2020年/103分/日本語（英語字幕付）

恵比寿映像祭ならではの上映プログラムをスクリーンで

個人映画作家の佐々木友輔による東京初公開の長編三部作《映画愛の現在》は、佐々木が移り住んだ鳥取を舞台に、地域の人々の映画愛に根差す映画文化の現在形を探るドキュメンタリー作品です。そのほか、自身の体験をベースに、愛やジェンダー、狂気などのテーマに取り組み、国内外で高い評価を得る映画監督／アーティストの石原海の新作を含めた過去短編作の上映など、日本・海外の複数のプログラマーにより、「スペクタクル後」をテーマに選び抜かれた恵比寿映像祭独自のラインアップは必見です。

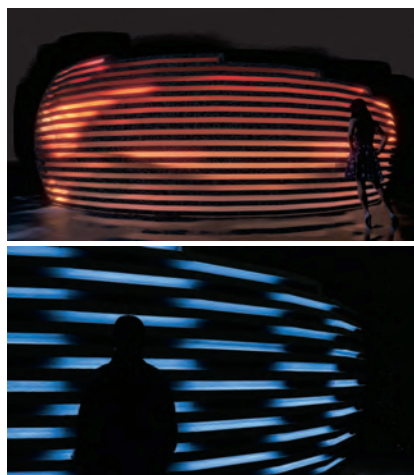
気鋭の映像作家、遠藤麻衣子の新作 —オンライン映画



遠藤麻衣子《オンライン映画（仮題）》より ©Maiko Endo 2021

会期中随時配信するオンライン映画プロジェクトを実施。ヒトの「心」の在処に着目し、作家自らが「自然(じねん)」に選択した被写体を撮影、編集することで「心」とはなにかを探求します。

一年越しの実現—WOWによるオフサイト展示

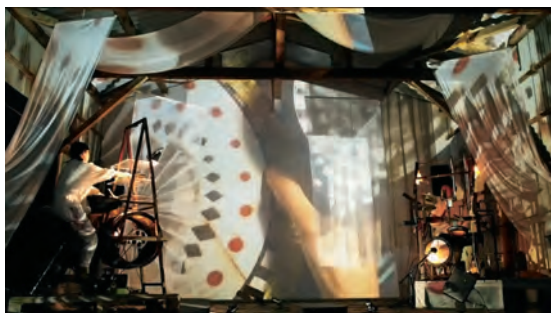


WOW《モーション・モダリティ / レイヤー》[参考図版]

明滅する光で人々の関心をひきつけ声高に情報を訴える映像が巷にあふれるなか、公共空間における映像のあり方を模索するクリエイティブ集団WOWによるプロジェクト《モーション・モダリティ / レイヤー》。2021年に展示予定だった本プロジェクトが一年越しに実現します。刻々と移り変わる夕暮れの雰囲気や雲の状態など、自然現象に似た様相を創り出します。

映像文化の楽しさに出会い、理解を深める—各種イベント&YEBIZO MEETS

瀬戸内海を拠点に活動する、夫婦パフォーマンスユニット usagingen



瀬戸内海の豊島を拠点に活動する、夫婦パフォーマンスユニット usagingenによる自作の装置と楽器を使った独自のライブ体験は、デジタルとアナログを組み合わせる生まれる映像と音が会場を包み込む、幻想的な世界観によって子供から大人まで楽しめるプログラムです。また「YEBIZO MEETS」では、ユニークな教育普及プログラムを多数実施。占星術研究家の鏡リュウジによる「恵比寿映像祭を星占いでガイダンス」など注目プログラムが目白押し。ただ見るだけでは感じられない映像のスペクタクル性、そして「スペクタクル後」を体験によって紐解きます。

総合テーマ「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」を軸に、東京都写真美術館の3つの展示室で、異なる展示構成によってご体験いただけます。3Fでは、インディペンデント・キュレーターの小原真史をゲスト・キュレーターに迎えた博覧会資料と当館コレクションによる企画を中心に、19世紀の博覧会から現代まで、歴史的にテーマを掘り下げます。2F、B1Fでは、多様な現代作家の作品群からテーマを紐解き、作品体験を広げていきます。

東京都写真美術館 3F *有料

01. スペクタクルの博覧会：小原真史企画

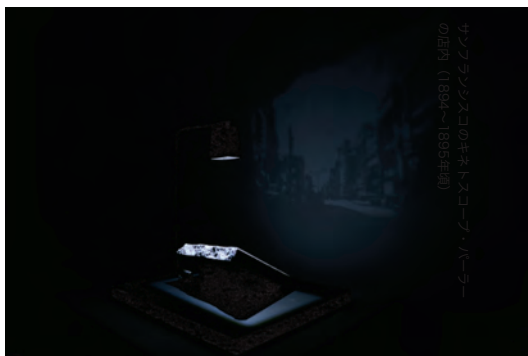


《フィリピン村（セントルイス万国博覧会）》1904年、個人蔵

19世紀半ばから20世紀前半は、世界中で大小様々な博覧会が開催され、多くの来場者がスペクタクルな祝祭空間に酔いしれた。遠隔地から集められてきた物の展示を通じて大衆が新たな世界認識を得る場となった博覧会は、人と物の大規模な移動によって支えられていた。現代社会に特徴的な様々な事象——グローバリズムやコロニアリズム、レイシズム、消費資本主義、ツーリズム——がより強固な形となって広がりを見せたのもこの時期の特徴である。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって人と物のモビリティに疑問符が突きつけられた今、「博覧会の時代」を省みることは、現代社会における私たち自身の欲望の所在を捉え直す契機となるのではないだろうか。「スペクタクル」をテーマにゲスト・キュレーターの小原真史の所蔵資料と東京都写真美術館のコレクションを組み合わせた展示を行う。

02. 平瀬ミキ《三千年後への投写術》



平瀬ミキ《三千年後への投写術》2021年 [参考画像]
Courtesy of Shinjuku Ophthalmologist (Ganka)
Gallery contemporary art & subculture

化石エネルギー資源が枯渇するかもしれない時代に向けて、映像やイメージを残すことは可能なのだろうか。図像データや投影方法の名残を留める手段として、記録媒体としての石に着目し、未来のアーカイヴを創造する。

03. エジソン社「キネトスコープ」（レプリカ） ●

東京都写真美術館蔵



サンフランシスコのキネトスコープ・パラーの店内（1894～1895年前）

石川亮《かもめ》2018年

1891年にアメリカのトーマス・エジソンによって発明された世界初の映写機一種、キネトスコープ。キネトスコープは世界的に人気を博し、アメリカのほとんどの街にキネトスコープ・パラーが設置された。のぞき穴をのぞいて動画を見ることから、当時は「ピープショー」とも呼ばれた。恵比寿映像祭では、映像作家、石川亮の35ミリフィルム作品によって、キネトスコープの体験を再現する。

04. ラウラ・リヴェラーニ & 空音央

《アイヌ・ネノアン・アイヌ》



ラウラ・リヴェラーニ、空音央 (AINU NENO AN
AINU NENO AN・アイヌ・ネノアン・アイヌ)
2018年 [参考図像]
Courtesy of G/P Gallery

ラウラ・リヴェラーニと空音央が取り組んできた長期プロジェクト《アイヌ・ネノアン・アイヌ》。北海道平取町二風谷で現代に生きるアイヌ民族に密着し取り組んできたプロジェクトを展示インスタレーションとして実現。ドキュメンタリーの可能性を探る。

東京都写真美術館 2F *無料

06. 山谷佑介《Doors》



山谷佑介《The doors》2018年 ©Yusuke Yamaguchi,
Courtesy of Yuka Tsuruno Gallery

写真家の山谷佑介による、写真撮影とドラムパフォーマンスが融合した《Doors》。ドラムセットの周囲に数台のカメラが設置され、山谷がドラムを叩いた振動をセンサーが感知。強烈なストロボ光と共に作家自身や周囲の状況が写し出され、そのイメージがプリンターから出力される。カメラと観客を前に、見る側と見られる側の意識と無意識が行き来する。

08. 佐藤朋子《オバケ東京のためのインデックス 序章 Dual Screen Version》

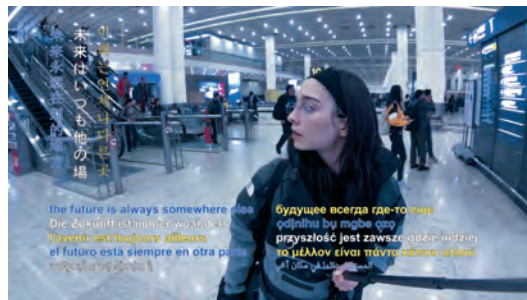


佐藤朋子《オバケ東京のためのインデックス 序章》
2021年 [参考図像] シアター・パフォーミング・アート・フェスティバル・東京
製作：シアター・パフォーミング・アート・フェスティバル・東京 撮影：佐藤健

岡本太郎が1957年に著した都市論「オバケ東京」をめぐるリサーチをもとに、シアター・パフォーミング・アート・フェスティバル・東京で製作・初演されたレクチャー・パフォーマンスを、恵比寿映像祭のために映像インスタレーション版として再構成する。また、2022年2月に開催予定のシアター・パフォーミング・アート・フェスティバル・東京にて、本作の続編「オバケ東京のためのインデックス 第一章」が初演される。

05. アマリア・ウルマン

《Buyer Walker Rover(Yiwu) Aka. There then》

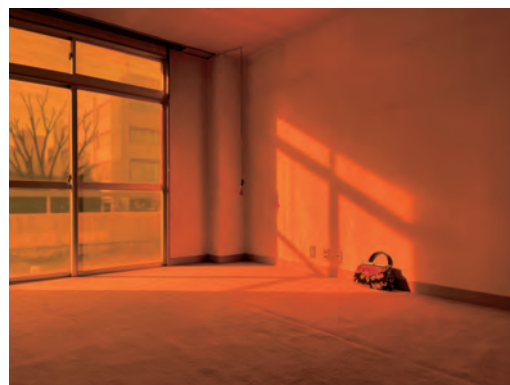


アマリア・ウルマン《Buyer Walker Rover
(Yiwu) Aka. There then》2019年
Courtesy Amalia Uрман and Wuzhen
International Contemporary Art Exhibition.

舞台は日用品の巨大な卸売市場があり世界中からバイヤーが集まる中国・義烏。ウルマン演じる主人公・アナのセルフィー・ヴィデオを通して、現代のグローバル消費社会全体が描かれていく。2022年1月14日より、初の長編監督作品《エル プラネタ》も日本劇場公開予定。(synca.jp/elplaneta/)

07. 三田村光土里

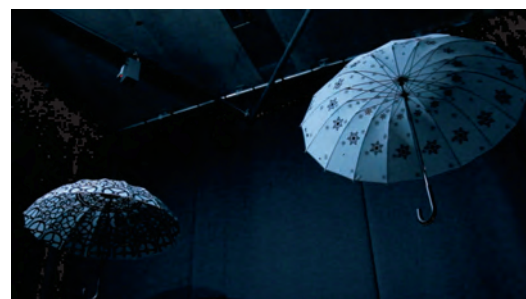
- ①《Till We Meet Again》
- ②《Till We Meet Again また会うために、わたしはつくろう》
- ③《〈Till We Meet Again また会うために、わたしはつくろう〉のためのサウンド・インスタレーション》



三田村光土里《Till We Meet Again また会うために、わたしはつくろう》のためのサウンド・インスタレーション
2020年 [参考図像]

写真、映像、音楽、言語や日用品などで、個人的心象風景を、誰もが共有できるような物語空間のインスタレーションとして実現してきた三田村。「アッセンブリッジ・ナゴヤ2020」で発表したインスタレーション《Till We Meet Again また会うために、わたしはつくろう》を再構築し、新たな記憶のイメージを探る。

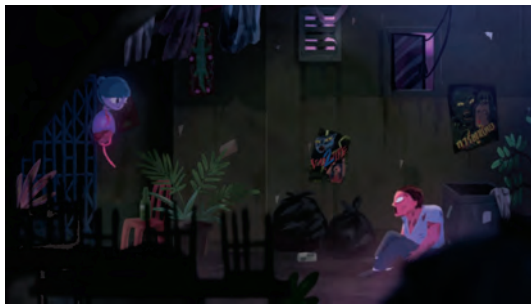
09. パンタグラフ《ストロボの雨をあるく》



パンタグラフ《ストロボの雨をあるく》2015年
Created for Exhibition "Motion Science" at
21_21 DESIGN SIGHT 2015

数多くの立体造形・アニメーションを制作してきたパンタグラフ。《ストロボの雨をあるく》は、映画と同様の原理で、絵が動いて見えるゾートロープの仕組みをストロボ効果を使い、傘の作品として実現した。

10. ひらのりょう《Krasue》 ●

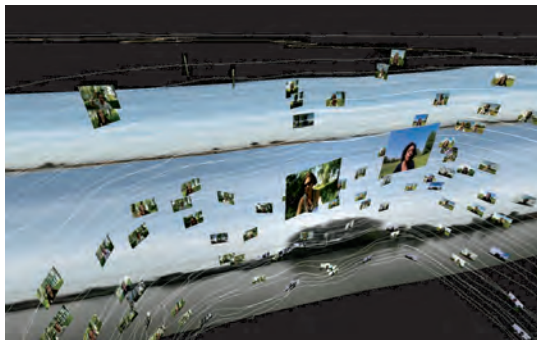


ひらのりょう《Krasue》インスタレーション
2021年

アニメーション作家／イラストレーター、ひらのりょうの新作となる、ノンストップ・ネオ・ノワール・スピリチュアル・アニメーション。東南アジアを舞台に殺し屋と妖怪が繰り広げるアクションホラーの世界をインスタレーションとして実現する。

東京都写真美術館 B1F *無料

11. 藤幡正樹《Voices of Aliveness》



藤幡正樹《Voices of Aliveness》2012年【参考画像】

動画をGPSの位置情報と共に3D空間で編集し、仮想空間と現実を結ぶ「Field-Works」シリーズに1990年代から取り組んできた藤幡正樹。《Voices of Aliveness》は、集合的な記憶を扱う、シリーズ到達点といえる。サウンドトラック監修は清水靖晃。本邦初公開となる。

12. サムソン・ヤン

《The World Falls Apart Into Facts》



サムソン・ヤン《The World Falls Apart Into Facts》
2019/2020年（改訂）
Production documentation/ Photo: Lily Yiyi Chan

オペラ「トゥーランドット」でも使用される楽曲「茉莉花」。中国民謡として知られているが、実は西洋に伝来した際に新たな解釈が加えられたものが、今日主流となっている。一方唐楽は、中国からの伝来後、日本でのみその原型が保存され続けている。中国生まれのアイコン的な音楽を通して、文化の伝播や正統性を問う作品。

13. 小田香《Day of the Dead》



小田香《Day of the Dead》2021年
制作：市原湖岸美術館

メキシコで撮影した映画《セノーテ》の素材をもとに、小田が初めて制作した映像インスタレーション。メキシコで古くから伝わる「死者の日」や、ユカタン半島の景色、人々。カメラの先の世界から、生と死が浮かび上がる。

プログラム解説 | 上映 (東京都写真美術館 1Fホール) *有料

東京都写真美術館1Fホールを会場に、恵比寿映像祭のために特別に編まれた上映プログラムを連日お届けします。劇映画から、実験映画、ドキュメンタリー、アニメーション、現代美術作品まで、日本初公開作品を含め、国内外から多様な作品が集います。上映後には、監督やゲストを招きトークを開催します。

各図版のキャプションは、■印のとおり。【WP】ワールドプレミア | 【AP】アジアプレミア | 【JP】ジャパンプレミア

01. 空音央 & ラウラ・リヴェラーニ 《アイヌ・ネノアン・アイヌ》—— 新しい肖像画

【AP】



空音央とラウラ・リヴェラーニが北海道沙流郡平取町二風谷に長期滞在し、アイヌにルーツを持つ人々やそのコミュニティを撮影。文化の保存・伝承と新たな発見の日常を繊細に写し取る。親密かつアーカイヴも意識した映像により、現代のアイヌ像をとらえようと試みる等身大のドキュメンタリー。

■《アイヌ・ネノアン・アイヌ》2021年/73分/日本語 (英語字幕付) 【AP】
【ゲストプログラマー：清水裕】

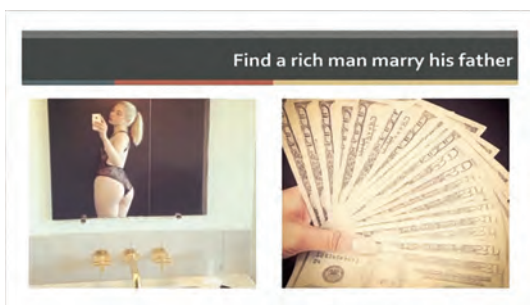
02. 佐々木友輔 《映画愛の現在》3部作



「日々、浴びるように映画を見なければ、優れた作品はつくれない。優れた文章を書くことはできない。」そう考えてきた個人映画作家の佐々木友輔。彼が2016年に移り住むことになった鳥取は、県内に3館しか映画館がない。佐々木はこの、一見映画にとって不毛の地で、映画を愛し、自ら上映会を主催し、作品を作る人たちと出会う旅に出る。全三部を東京初公開。

■《映画愛の現在 第Ⅰ部/壁の向こうで》2020年/103分/日本語 (英語字幕付)
□《映画愛の現在 第Ⅱ部/旅の道づれ》2020年/103分/日本語 (英語字幕付)
□《映画愛の現在 第Ⅲ部/星を蒐める》2020年/107分/日本語 (英語字幕付)

03. アマリア・ウルマン レクチャー・パフォーマンス集

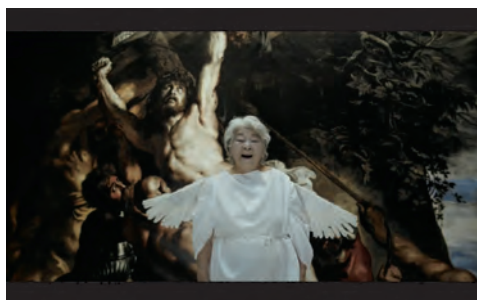


展示部門にも出品し、また、初監督長編映画《エル プラネタ》(synca.jp/elplaneta/)が日本での公開を控えるアマリア・ウルマン。SNSをはじめとする様々なメディアを駆使し、ジェンダーや格差などの社会問題に鋭く切り込む新時代のアーティストである彼女の、過去のレクチャー・パフォーマンス映像群を、初の日本語字幕付きで上映する。

□《Buyer, Walker, Rover》2013年/12分
■《Excellences & Perfections (ICA)》2014年/11分 Courtesy of the Artist
□《The Future Ahead》2014年/16分
□《Sordid Scandal》2020年/19分
すべて英語 (日本語字幕付)

04. 石原海《重力の光》と過去短編集——天国と地獄のランドスケープ

【WP】あり



自身の体験をもとに、愛やジェンダー、狂気などのテーマに取り組み、国内外で高い評価を得てきた映画監督/アーティストの石原海。2021年の最新作《重力の光》では生活困窮者を支援するキリスト教会に集う人々を主人公にし、2021年に資生堂ギャラリーで展示され話題となった。第14回恵比寿映像祭では、その本作に出演者の日常や困窮者支援の記録映像を加えた「ドキュメンタリー版」を一般初公開する。

□《狂気の管理人》2019年/12分/日本語・英語 (日本語・英語字幕付)
□《汚れた天国》2017年/12分/日本語 (英語字幕付)
□《永遠に関する悩み》2015年/7分/日本語 (英語字幕付)
■《重力の光 ドキュメンタリー版 (仮題)》2022年(新作)/約70分/日本語 【WP】

05. C.W.ウィンター&アンダース・エドストローム《仕事と日（塩谷の谷間で）》



京都の山村に暮らす人々の生活を一年にわたって描き、ベルリン国際映画祭エンカウンターズ部門最優秀賞を受賞した本作。

《アンカレッジ The Anchorage》（2009年）以来、二度目のアンダース・エドストロームとC.W.ウィンターによる長編共同監督作。

■《仕事と日（塩谷の谷間で）》2020年／480分／日本語（英語字幕付）

06. 新進作家短編集——現実と夢の揺らぎを紡ぐもの

【AP】あり



目に見えない力に左右されながらも個の存在が浮かび上がるプログラム。中国・貴州省凱里の変遷を写す《金剛経》。目に見えない力を感じながら生きるカップルを俯瞰する《夜の電車》。存在の曖昧さや意識と行動の関係を捉えようとする斎藤英理の作品群。《あなたはそこでなんて言ったの？》では作品内における多重の窓を通して見る構造によって、観客へ個人的な体験を受け渡し、記憶を昇華する。

□ピー・ガン《金剛経》2012年／22分／中国語（日本語・中国語・英語字幕付）

協力：リアリーライフフィルムズ合同会社

□川添彩《夜の電車》2019年／15分／日本語・中国語（日本語字幕付）

□斎藤英理《全ての傷が癒えますように》2021年／5分5秒

□斎藤英理《mistake, blockade, fancy, panky》2020年／4分44秒

□斎藤英理《水のない島》2019年／7分45秒

□斎藤英理《黒い夢》2019年／3分37秒

□斎藤英理《ゆるる：夢遊する身体》2018年／3分38秒

■池添俊《あなたはそこでなんて言ったの？》2021年／20分／日本語・中国語（英語・日本語字幕付）【AP】

【ゲストプログラマー：清水裕】

07. After the spectacleなアニメーション——DigiCon6 ASIA



次世代を担う映像クリエイターの発掘・育成を目的としてスタートしたアジア最大規模のショートムービーの映像祭23rd DigiCon6 ASIA（TBS主催）から特別プログラム。近くて遠いアジアの8地域から創り手の「いま」を映す11作品を厳選。想像力はアジアを巡り、未来へつながる。表情豊か、色彩鮮やかなショートムービーの世界を楽しめるプログラム。

□《around and around...2021》2021年／3分28秒 統括ディレクター：オースミューカ

□パラムJ《Story of a beginning》2020年／11分48秒／ヒンディー語（日本語字幕付）

□原彰吾《WANDER》2021年／4分6秒／日本語

□プリンプ・スラバクピンヨ、パッタマ・ホームロッド《Little Miss Dungjai》2020年／7分31秒／（英語・日本語字幕付）

□伊藤瑞希《高野交差点》2021年／6分30秒／日本語（英語字幕付）

□ショキール・コリコヴ《GIRL AND CLOUD》2021年／11分33秒

□矢野はなみ《骨喰み》2021年／9分45秒／日本語（英語字幕付）

□チャン・サンウク《Stars on the Sea》2021年／6分5秒

■副島しのぶ《Blink in the Desert》2021年／10分34秒／英語（日本語字幕付）

□モタレブ・ラハマン・アカシュ《Life》2021年／5分4秒／ベンガル語（日本語字幕付）

□マリーヘ・ゴラームザーデ《Tangle》2019年／7分36秒

【リンク：DigiCon6 ASIA／ゲスト・プログラマー：山田亜樹（DigiCon6 ASIAフェスティバル・ディレクター）】

08. アニミスティック・アパタス（仮）【メー・アーダードン・インカワニット+ジュリアン・ロス・セレクション】【JP】



非西洋的文脈から、人間以外の存在も体系化された歴史をもつという観点で、アジア出身の作家たちの作品を「アニミズム的メディア」ととらえ、国、場所、霊、テクノロジー、人間との関係を探っていくプロジェクト。今回の恵比寿映画祭のテーマのために選ばれた5作家の作品を紹介する。

□パットンボン・モン・テスラティブ《LULLABY》2019年／8分／タイ語（日本語・英語字幕付）

□リアル・リザルディ《Tellurian Drama》2020年／26分／インドネシア語（日本語・英語字幕付）

□ジュアニータ・オンサーガ《The Jungle Knows You Better than You Do》2017年／20分／スペイン語（日本語・英語字幕付）

■シャムバビ・カウル《Mount Song》2013年／8分

□チューン・ミン・クイ+フレディ=ナドルニィ・ブストシュキン《Mars in the Well》

2014年／19分／ベトナム語（日本語・英語字幕付）

【ゲスト・プログラマー：メー・アーダードン・インカワニット、ジュリアン・ロス】

全て【JP】

作品解説 | オンライン映画 (オンライン)



遠藤麻衣子 ENDO Maiko

映像作家の遠藤麻衣子による、会期中配信されるオンライン映画プロジェクト。

ヒトの「心」。それは実態がなく、どこにあるのかわからない。ヒトにとって大事であるとされながら、謎だらけのこの「心」とは何なのか？今作では、作家自身の「心」が「自然(じねん)」に選択した被写体を撮影、編集することで、その「心」の在処を探求する。

この作品の物語は、まだ存在しない。日々、無為に撮影を進めながら、作家の「心」はある物語を展開しだすのかどうか？そしてその物語を読み解こうとする視聴者の「心」がどう動いていくのかを、オンラインを通して実験する試みである。

料金：1,500円（会期中通し券）

遠藤麻衣子《オンライン映画（仮題）》より ©Maiko Endo 2021

作品解説 | オフサイト展示 (恵比寿ガーデンプレイス センター広場)

WOW 《モーション・モダリティ / レイヤー》 *2021年に展示予定だったプロジェクトが一年越しに実現！



WOW 《モーション・モダリティ / レイヤー》 [参考図版]

風景に溶け込む「光と影」による映像のモニュメント

日常に映像があふれかえる現代。

明滅する光で人々の関心を喚起し、声高に情報を訴える映像が多いなか、公共空間における映像のあり方を模索するためのプロジェクト。

四角い平面の映像から自由な形の映像へ、強く発光する映像から光が回り込む柔らかな映像へ、スクリーン内の映像から、風景としての映像へ――。

映像にかたちを与え、素材と一体化した映像が風景を作りだし、環境の一部になるかのような佇まいを持つ映像と照明の間の仕組み。

刻々と移り変わる夕暮れの雰囲気や、雲の状態、風がつくる水面のゆらぎなど、自然現象に似た様相をこのモニュメントは創り出す。

会場：恵比寿ガーデンプレイス センター広場

料金：無料

WOW

東京、仙台、ロンドン、サンフランシスコに拠点を置くビジュアルデザインスタジオ。CMやコンセプト映像など、広告における多様な映像表現から、さまざまな空間におけるインスタレーション映像演出、メーカーと共同で開発するユーザーインターフェイスデザインまで、既存のメディアやカテゴリーにとらわれない、幅広いデザインワークをおこなっている。さらに、最近では積極的にオリジナルのアート作品やプロダクトを制作し、国内外でインスタレーションを多数実施。作り手個人の感性を最大限に引き出しながら、ビジュアルデザインの社会的機能を果たすべく、映像の新しい可能性を追求し続けている。
www.w0w.co.jp

トークやイベントなど多様なプログラム

トーク・セッションやパフォーマンス、イベントなどを開催。展示や上映だけではない様々な形式で、映像文化の楽しみ方や理解を深める場を提供します。

ライブ・イベント—東京都写真美術館 1Fホール、2Fロビー *料金はプログラムによって異なります

東京都写真美術館1Fホールや2Fロビーを会場に、従来の映像の枠を超えたパフォーマンスを行います。いつもとは違う東京都写真美術館での新しいアート体験をお楽しみください。

トヨダヒトシ 2日間限定「映像日記／スライドショー」



トヨダヒトシ《NAZUNA》2005年（多摩川河川敷での上映〔2008年〕より）

トヨダヒトシはわたしたちの日常を思い起こさせるような瞬間を、アナログのスライドプロジェクターで一つひとつ紡いでゆく。イメージは瞬きをするように切り替わり、残像となって消えてゆく。《NAZUNA》（2004-2022年）と《spoonfulriver》（2007-2022年）の二作品を上映予定。

会場：東京都写真美術館 2Fロビー
料金：無料

Usaginingen 映像と音楽のライブパフォーマンス



豊島ウサギニンゲン劇場

世界にひとつの手作りの映像機と楽器を操る、夫婦ユニットusaginingen。デジタルとアナログを組み合わせる生み出される幻想的な映像と音が、会場を包み込む。子供から大人まで楽しめる、新しいライブ映像体験。

会場：東京都写真美術館 1Fホール
料金：1,500円（前売）／1,800円（当日）

ラウンジトーク—オンライン *無料

インターネット上からだれでもアクセスできるオープンな場で、出品作家やゲストを迎えてトークを行ない、フェスティバルの楽しみを広げます。

シンポジウム—東京都写真美術館1Fホール、オンライン *無料

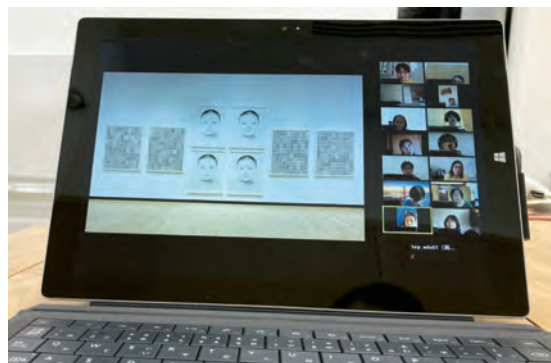
総合テーマ「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」を掘り下げるシンポジウムを、多彩な登壇者を迎えて開催します。

プログラムの詳細は決定次第、恵比寿映像祭公式サイト（www.yebizo.com）で発表いたします。

YEBIZO MEETS（教育普及プログラム）

「YEBIZO MEETS」は、多くの人々が多様な映像表現に触れる「開かれた」機会として、映像文化を紹介・体感するプログラムです。映像祭で紹介されているジャンル横断的で多彩な作品を理解するための鑑賞の手掛かりを提供していきます。今回は、「教育普及プログラム」がお目見えしました。多様な人々が楽しめるワークショップをはじめとする教育普及プログラムの充実をはかり、未知の作品との出会い、鑑賞者の発見を促す機会を提供します。

「映像祭を見て、聞いて、語る鑑賞ワークショップ」[参考図版]
(写真は「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」澤田知子展（2021年）での開催の様子）



1. やさしい日本語による、じっくり見てみるガイド

展示作品の中から主な作品をピックアップした、やさしい日本語によるガイドです。体験的に作品と出会えるような問いかけと解説によって、じっくりと深い鑑賞へと誘います。

2. 恵比寿映像祭を星占いでガイダンス

占星術研究家の鏡リュウジが占星術により導き出したそれぞれの星座の特性をご紹介します。思いがけなく結ばれる作品との縁が、より深い鑑賞体験へ誘います。フェスティバル会場のすべての作品を鑑賞するには時間が足りない方や、意思を越えた鑑賞体験をお望みの方は、星のガイダンスによって導かれた作品を中心にめぐってみてはいかがでしょうか？1FのYEBIZO MEETSコーナーにてお配りしています。

占星術：鏡リュウジ（占星術研究家）

3. パンタグラフによるスペクタクルなワークショップ

出品作家のパンタグラフとともに、手作りアニメーション装置を制作し、アニメーションの仕組みを楽しく学びます。制作体験を通じて、映像作品への理解をより深めるプログラムです。手や体を動かし、フェスティバルの楽しさを再発見します。

講師：井上仁行 [パンタグラフ]（出品作家）
会場：東京都写真美術館1Fスタジオ
参加費：無料
対象：小学3年生以上どなたでも
定員：15名／事前申込制

4. 東京都写真美術館ボランティアによるアニメーションオープンワークショップ

事前申込不要、ちょっとしたスキマの時間に立ち寄って気軽にアニメーション制作を体験できるオープンワークショップです。当館ボランティアによるサポートで、アニメーションの原理に触れながら、当館オリジナルの驚き盤キットを用いてアニメーションを手作ります。お目当ての上映の待ち時間などに、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

スタッフ：東京都写真美術館ボランティア
会場：東京都写真美術館1Fスタジオ
参加費：無料
対象：子供から大人までどなたでも
定員：50名

5. 映像祭を見て、聞いて、語る鑑賞ワークショップ（オンライン開催）

障害の有無に関わらず、多様な人々とともに映像作品の「見えること」「見えないこと」「印象」を言葉にしながら鑑賞します。ひとつの答えにたどり着くことを目的とせず、それぞれ多様な見方や経験があることを発見するプログラムです。

講師：視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ
参加費：無料
対象：中学生以上どなたでも
定員：7名／事前申込制

6. インスタライブ・ワンポイントナイトツアー

恵比寿映像祭の見どころ案内や作品解説、フェスティバルの楽しみ方や地域連携先の様子などをインスタライブでお届けするナイトツアーです。フェスティバル訪問の計画を立てたり、または遠隔地からフェスティバルの雰囲気を見てみたい、様々な楽しみ方ができます。まずは恵比寿映像祭公式Instagram（@yebizo）をフォロー！

出演：映像祭キュレーターやスタッフ、作家、地域連携の方々など
日時：恵比寿映像祭会期中にランダムに配信

YEBIZO MEETS 地域連携プログラム

「YEBIZO MEETS」は、多くの人々が多様な映像表現に触れる「開かれた」機会として、映像文化を紹介・体感するプログラムです。「地域連携プログラム」においては、地域で活躍するアートの担い手たちと行なうフェスティバルテーマ通底の連携企画や地域を散歩しながら巡るシールラリーなどを通じて、フェスティバルを楽しむきっかけをつくります。

公益財団法人日仏会館 TMF日仏メディア交流協会



映像と講演 ここだけのフランス映画Ⅱ
セリーヌ・シアマ監督『ガールフッド』

日時：令和4年2月15日（火）視聴 00:00-23:59、講演 20:10-20:40
会場：オンライン
料金：1,000円（要事前申し込み）
www.mfjtokyo.or.jp

MA2 Gallery ArtSticker



石川直樹 個展

日時：令和4年2月6日（日）～2月20日（日）13:00-19:00
料金：無料
休日：月・火
www.ma2gallery.com

工房 親



ここではない場所
根元篤志×工房 親

日時：令和4年2月2日（水）～2月26日（土）
水～土 12:00-19:00 日・祝 12:00-18:00
料金：無料
休日：月・火
www.kobochika.com

MEM



アントワン・ダガタ展「Virus」

日時：令和4年2月3日（木）～2月27日（日）13:00-19:00
料金：無料
休日：月
www.mem-inc.jp

アートフロントギャラリー



竹中美幸展

日時：令和4年2月4日（金）～2月27日（日）
水～金 12:00-19:00 土・日・祝 11:00-17:00
料金：無料
休日：月・火
www.artfrontgallery.com

POETIC SCAPE



渡部敏哉 | Somewhere not Here

日時：令和4年2月12日（土）～4月2日（土）13:00-19:00
料金：無料
休日：日・月・火
www.poetic-scape.com

民画東西比較研究会 公益財団法人日仏会館



民衆画の世界 エピナル版画と大津絵を中心として

日時：令和4年2月17日（木）～2月23日（水・祝）10:00-18:00
会場：日仏会館ギャラリー
料金：無料
休日：会期中無休
www.mfjtokyo.or.jp

MuCuL



水恋（sui-ren） 佐藤慶子

日時：令和4年2月4日（金）～2月20日（日）13:00-18:00
料金：無料
休日：月・火
www.e-mucul.com

NADiff a/p/a/r/t



Words for photography by Culture Centre

日時：令和4年2月3日（木）～2月20日（日）13:00-19:00
料金：無料
休日：月・火・水
www.nadiff.com

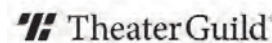
AL TRAUMARIS



東恩納裕一、滝戸ドリタ／世界の涯での庭と室内。

日時：令和4年2月3日（木）～2月13日（日）11:00-19:00
料金：500円
休日：会期中無料
www.al-tokyo.jp
企画：TRAUMARIS 住吉智恵

シアターギルド



うずまき

日時：令和4年2月5日（土）15:00-16:31
料金：2,500円（要チケット事前購入）
theaterguild.co

Rocky Shore



オープントーク

日時：令和4年2月5日（土）～2月20日（日）
会場：オンライン（会期中視聴可）
料金：無料
www.rockyshore.tokyo

料金／チケット情報

第14回恵比寿映像祭では、以下のプログラムが有料です。

※他のエリア及びプログラムは無料です。

※有料・無料にかかわらず、東京都写真美術館の展示をご鑑賞の際は、オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。

有料プログラム

・展示（東京都写真美術館 3F展示室のみ）

料金：500円（日時指定予約を推奨します）

*未就学児、学生（小・中・高校生含む）、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方とその介護者（2名様まで）は無料（日時指定予約対象外）

・上映（東京都写真美術館 1Fホール）

料金：500円（前売）／1,000円（当日）

・スペシャル上映：C.W.ウィンター&アンダース・エドストローム《仕事と日（塩谷の谷間で）》（東京写真美術館 1Fホール）

料金：1,500円（前売）／1,800円（当日）

・ライブ・イベント：usaginingen 映像と音楽のライブ・パフォーマンス（東京都写真美術館 1Fホール）

料金：1,500円（前売）／1,800円（当日）

*上映、スペシャル上映、ライブ・イベント（usaginingen）をご鑑賞の際は、オンラインによる日時指定前売券の購入を推奨いたします。

・オンライン映画 遠藤麻衣子

料金：1,500円（会期中通し券）

○日時指定予約および前売券の販売は令和4年1月22日（土）午前0時から開始予定です。

○当日券は、東京都写真美術館 1F受付で各日10時より販売いたします。

お問合せ

プレスリリース／広報用画像／ご取材に関するお問合せ

恵比寿映像祭プレスコンタクト担当（共同ピーアール株式会社）：田中（たなか）、安田（やすだ）

TEL：03-6264-2382／FAX：0120-653-545／E-mail：yebizo2022-pr@kyodo-pr.co.jp

携帯（田中）：080-8866-6183、（安田）：090-7909-5164

※本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しています。

「広報用図版申請フォーム <https://taylori.com/f/yebizo2022/>」より申請をいただくか、

①ご所属 ②貴媒体名 ③掲載予定時期 ④ご希望画像の作家・作品名などを記入のうえ、

上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます

恵比寿映像祭に関するお問合せ

※ 報道・媒体関係者様のお問合せに限らせていただきます。

恵比寿映像祭担当（東京都写真美術館）：柳生（やぎゅう）、池田（いけだ）、平澤（ひらさわ）、鈴木（すずぎ）

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TEL：03-3280-0034／FAX：03-3280-0033